

飛耳長目

通巻192号 令和元年11月1日発行

「開頭」五月号 通巻第78号昭和22年5月発行
大学の門

〈新入学の学生諸君に〉 (1)

森信三

これは去る四月初め、神戸大学教養学部新入学生に対して行った講話の概要である。

一

こうして高い処に立って、諸君たちの新しい姿に接すると、私にはいろいろな感慨の去来するのを禁じ難いものがある。

第一に頭に浮ぶことは、諸君らの上に加わる今後の重荷である。この点については、もちろん諸君も、ある程度までは、あらかじめ覚悟して入ってこられたこと、と思うが、しかし今後諸君が、いよいよ正式に本学の学生として日々の生活を始めるようになると、これまで諸君の考えていたよりも、遙かにその主荷の加重が考えられるではないかと思う。

元来からいえば、新入学生たる諸君に対して私の最初になすべき挨拶は、何よりもまず、諸君の入学を祝う言葉であるべきであろう。にも拘らず私は、今ここに、そうした祝意を表わすような言葉で諸君に対する話を始めようとは思わない。何となれば、そうした祝意のことばは、すでに先日学長から六甲の本部の講堂で話されたことであるから、改めてここに述べる必要はあるまいと思う。諸君にとって、入学という事実そのものが、何よりも目出たい現実であって、それは入学許可の発表と同時に、すでに決定済みである。それ故

私としては、むしろ今後諸君の上に現われるであろういろいろの事柄や問題の二三について話す方が、より実質的な意味における「お祝い」のことばとなるのではないかと思う。それも成るべくザックバラに話した方が、諸君のために親切ではないかと思うのである。

諸君も知っているように、着物にも裏と表があるように、すべての事物について理想と現実とは違うのが常である。この間の学長の話は、私からいえば言わば着物の表にあたる話で、キレイではあるが、現在の学生生活の現実には、ああしたキレイごとだけでは済まされないように思われる。そこで私のこの話は、どちらかと言えば実際の現実面を主として話すことにしたいと思う。この点は、あらかじめ諸君の御承認を願っておかないと、あとで苦情を言われても、それではもう追いつかぬことになってしまう。

二

まずその手始めとして、この間の学長の話では大学という処は「真理探求の殿堂だ」とあったけれど、しかしこれは少々キレイ過ぎる言葉ではないかと思う。即ち大学が「真理探求の殿堂」であるというところは、大学の理想ではあるが、しかし常にそれが現実であるとは言いがたいと思う。実際今日幾百をもつて数えられる日本の大学が、それぞれ、「真理探求の殿堂」であるというところは、正直に言っても、私にはすぐに肯定の答えをなし得ないものがある。もちろん「真理探求の殿堂」と

いうことばには、そのかみギリシヤの詭弁学派の人々が「自ら知識の所有者」たることを任じて「ソフィスト」（知識の所有者の意）と言ったのに対して、プラトンは自らを「知識を愛求する者」として「フィロソフィオス」（愛知者の意、それが転じて哲学者という訳語となる）と称したのに対比せられるような、謙虚な意味がありはする。

だが、それにも拘わらず私は、現在の我が国の大学を「真理探求の殿堂」というような言葉で以て表現することに対しては、何かしら一面はゆいものが感じられるのである。少なくとも私自身は、我が身を顧みて「われは真理の探求者である」と公言する勇氣はもち合せていない。勿論諸君らのような若い人々には「諸君は今や輝かしい真理探求の殿堂に一步を踏み入れたのである……」というような表現の方が、遙かに多く諸君を満足させるでことが分らぬではない……（一同笑）だが、少くとも私自身に關する限り、私は厳しい意味において自らを「真理の探求者」であるという勇氣はない。少くとも無条件にこのような言葉を自己の上に冠せるほどに、まだ精神の動脈硬化は来していないつもりである。（一同大笑）

では何故わたくしが、ひとり学長だけでなく世間一般に通用していると言つてよいこの言葉に対して、ここに、このような異議めいたことを言うのであろうか。それは、ひとえに、「真理」という言葉の持つ本来の厳しさを保持し、乃至は快復したいと思うからである。私の考えるところでは、真理というものは

厳密には教えることも出来ないものだと思う。したがつてまたそれは他から教わることもできないものということになる。「真理」とは、このように厳しいものであり、随つて現在の新制大学を以て「真理探求の殿堂」であるということとは、厳しい意味では容易に言い難いのではないかと思う。少くともそこには、私などのように、こうした言葉の該当し兼ねる人間のいることを、否定し得ないのである。

三

ではこのような立場に立つとき、現在の新制大学は、いったいどういふ処と考へたらよいであろうか。いま端的にわたくしの考へを述べるとなれば、国民として一応の高等教育を受ける場所ではないかと思う。こういうと諸君は「高等教育ならわれわれはすでに高等学校で受けてきた」と言われるかとも思う。だが私の見るところでは、現在わが国の高等学校で授ける程度の教育は、初級ないしは中級の教育であつて、真の意味の高等教育とは言い得えないと思う。小中学の教育は……中学校という名称は使われているが、実は兩者を合せて国民としての基礎教育であつて、これを以て国民としての中級の教育を見るわけにはゆかぬと私は考へるのである。そうした国民としての基礎的な義務教育をうけた上で高等学校の教育をうけて、初めて国民としての中級の一般教育をうけたことになるわけである。随つてこうした實際の現実に立場に立つとき、新制大学を以て国民としての高等

教育を授ける処であつて、「真理探求の殿堂」という名は、少々名前負けする危険があると言つても、必しも過言ではないと私は思う。

では「真理の探求」ということは、容易でないとしても、いやしくも大学が存在する以上、どうしてもそこではなければならぬ任務があると思うが、それは、一体如何なることであろうか。それについて私は、少くとも二つの重要な任務があると思う。その一つは、将来諸君が、それによつて世に立つところの専門的知識の概要を身につけることである。今一つは、人間として、この人生を如何に生きるべきかという根本問題について、その端緒を掴むか、少くともその方向を決定することであろう。ここで「専門的知識の概要を身につけることだ」などと言うと、またもや諸君らのお気に召さぬかとも思うが、しかし私は、もしそれが真に身についたとしたら、それは大したことだと思つたのである。というのは、政治にせよ経済にせよ、真によくその概要をつかんだ「入門書」というものは、現在そうざらにはないのである。あえて名著とまでは言わずとも具眼の人々の間で真に「良書」といわれているような「入門書」ないしは「概論書」というものは、一つの専門について、そんなに多くは教へ得ないのが現状である。ということとは、相当の学者にとつても、一つの専門的知識を「真に身につける」ということの決して容易でないことを示すものといつてよいと思う。してみればいま新制大学における一つの重要な任務が、諸君が他日世に立つ際に必要な専門的知識の概要を身につ

けることにあると思うのも、決して低きにすぎない目標でないことが分って頂けるかと思う。

四

次に今一つの問題である「人間としてこの人生を生きる態度の端緒または方向をつかむ」ということも、前者に努らず重大な問題だと思ふ。では何ゆえそうなのか。今たとえを円にとつてみると、前の専門的知識の概要を身につけるといふことは、言わば円周にあたり、これに対してこの後の方の問題は円心にあたるからである。もちろん円心と円周とは相即して初めて一個の円を成すのであるから、どちらか一方だけが大切だとは言えない。だがこれら二つのうち、強いてどちらか一つを取らねばならぬとしたら、私はやはり後者をとりたいたいと思う。即ち人間的態度の確立した方を取りたいと思うのである。というのは、そうした人間は、よし最初のうちは専門的知識において不十分であったとしても、自己に与えられた環境に応じて、全力をあげて自己の道を切り拓いてゆくからである。

ところで、こういうと諸君のうちには「それが即ち真理の探求ということではないですか」と切りこんでくる人があるかも知れない。だが率直に言って、「真理の探求」ということには、どこかに学者臭いところがあるが、「人間として生きる態度を確立する」という言葉には、そうした意味はない。百姓をしていても、工場の労働者をしていても、たとえ自動車の運転手をしていても、それは可能で

あり、また為すべきことだと思ふのである。まして諸君のように、とにかく一応国民として高等教育をうける幸運に恵まれた以上、人間としてこの一生を如何に生きるか？という問題だけは、どうしても回避できない事柄だと思ふ。

五

もちろんこれは重大問題であつて、ある意味では、自然科学において、新説を唱える以上には困難な問題であるかも知れない。というのは、元来自然科学というものは、部分的真理を次第に積み重ねてゆくものであるが、「人生の道」を発見するということは、自己の全生命を賭ける問題だからである。

が同時にまた、自然科学で新説を唱えるというには、それ相当の天分を必要とし、もちろんそこにある程度の専門的知識を要することはいままでもないが、自己の「生きんとする道」を発見するには、必ずしもそうした特定の教養の必要はないといつてよい。そこにはただ自己と社会とに対して、どこまでも真摯誠実であることが、要求せられるのみである。否、真に自己の「生きる道」を発見するためには、ある意味からは、自分の持つている全教養を投げ打つ体の決心覚悟を要するとさえ言える。それ故、こうした点から言えば、諸君らのように、これから「大学教育」を受けようとしている人々にとつては、うっかりすると、却つて「人間としての生きる道」を発見することの方が困難だと言えるかも知れない。

現にこのことは、時代が現在のようになして、流れている時代にあつて、平穩無事の時代に比べて、幾十層倍も、難しいかも知れない。現にこの問題は、私のような一介の平凡な教師であつても、日夜その念頭を去らないといつても良いのである。すなわち「真理の探究者」というような輝やかしい名は、到底あたるところではないが、「人生の探求者」ということだけは、私如き人間であつても、人間の一人である以上は、辞退するといふわけにはゆかないのである。(つづく)

開頭舎小史 三

森信三先生の御就職逸話

森 文子

1

私事にわたつて恐れ入るが、一体私どもが建国大学へ行くようになったのは西晋一郎先生から、作田先生への御推挽によるものであつて、私もそのことにはいくらか関係がある。

傍系の講師から行つて、京都大学の哲学を主席で出、卒業後第一回の哲学研究会に研究発表をすることになった。その時の題目は「西哲学について」というのであつた。ずっと後年聞いたことだが、京大の哲学研究会に講演をするものは、まず順調なコースを約束されるのが定石なのだそう。しかし何分西田哲学の牙城で全く対照的な「西哲学について」という旗幟を高く高く掲げたのであるから、その後大学院に四年いたが、栄達への門は自然に全て閉ざされたものも無理は無い。自覚してそうしたのではないかもしれ

れないが、一種の強烈な自己表現を敢行したのだ

2

自らの業を背負い、背水の陣を敷いて、大阪の男女両師範の専攻科に倫理哲学の教鞭をとること13年。その時代は全く悲壮な生活であった。形式的には平凡な生活とも言える。しかし自ら恃むところのある人の世に入られぬ生活ゆえに、一種悲壯の香りを帯びるのである。そのときの講義をプリントしてあったものを、後に芦田先生の率いる同志同業社から出版したのが、「修身教授録」であった。師範の先生として教える以外にも、各小学校から招かれて指導に当たると言うわけで、家へは全く風のように去来する、というのが適切な表現である。遅い帰宅後は何時寝るともなく深夜まで二階にこもって勉強するので、食べても食べないでも食事と寝床と、身の回りの用意さえしておけばいいというよりも、そうする外ないのであった。一切の他力や甘え心を切り捨てて、自分の持ちだけで立つ外なく、また立ったその姿は立派だった。私はその立派さに服して、女中と2人、弱い二人の子どもを育てるのに、ただいそしんだ。「修身教授録」が迎えられたのは偶然ではなかった。

3

当時高師時代の恩師金子健二先生が校長をされている静岡の高校へ来ないかと招いて下さった。しかし夫は「自分の身は西先生にお任せしてあるから」と挨拶したので金子先

生は手を引かれた。けれども西先生には、一言もお願いしてある訳では無い。では現在の仕事に安住しているかという、やはり学者として時間の余裕のある生活を熱望していた。静岡の事件のあった後、私は当時実家のあった広島へ帰ったついでに、西先生をお尋ねして、静岡のいきさつを話した。「そうでしたか、森君は非常に見識は立つがなかなか肚の強い人だね、そう聞いてはなんだか借金をしているような気がしてきました。私は大阪で十分に活躍しているから、それで満足しているかと思っていた……」

落ち着いた和室で、伏し目がちに深沈とした表情で、静かにポツポツとお話になる。1つの世界を頭の中に形作って、独り籠もっている人の寂しさと威厳が漂い、なんとなく寄りつきにくい印象を受ける。余計なものはない。いていなくて、苔のように物錆びた風情である。

私は頼るなら意思表示をして、お願いすべきだと思ったのだ。永遠に黙って期待する、というのは私の流儀にはない。このような世俗的な話などおおよそ似合わないお方に見えたが、身につけた哲学が、一見人間味を洗い去ったように見えても中身には平凡なところや温かいものを持っていらした、そういう方であつたと思う

「高師と思うが色々な事情があつて、私の自由には全然ならない、しかしなんとか考えておきましょう」

4

それから間もなく京大の経済学から満州の建国大学に近く赴任なさるはずの作田先生が

自動車で来訪された。(西先生・作田先生はともに建国大学の創立委員であつた)「日本でまだやる仕事があるが」と躊躇したが、結局行くことになった。望んでいた研究の時間は十分にあるはずであつた。建国大学の「精神講話」を持つということが気を負うに足りた。もうわずかで資格の付くはずであつた恩給の期限も潔く捨てた。教授か助教授か、それも質はしなかつた。

昭和十四年春三月、満州へ向けて独り発つていく大阪駅のプラトフォームを人が埋め

た。「奥さん、賑やかな見送りで、さぞ嬉しいでしょう」と愛知県からわざわざ来られた伊藤証信先生が私を顧みた。

あとがきに替えて

森信三先生が就職時、乾された原因と建国大学に御縁が出来た訳を奥様が披瀝。いかに森信三先生は控えめなお方であつたかがよく分かる。また天王寺師範時代の下積み的な日々のお姿がよく分かる。冒頭の森信三先生の挨拶文は新入生に対しての日頃の持説を懇々と説かれていた貴重なものだ。次号と併せて、「一読をお願い。ついでながら、森文字奥様は広島高師の姉妹校たる女学校卒で、在校中から高師の先生方や学生らと交流があつて、森信三先生が見初められたのであつた。(30日二纂)

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話0744-45-3422

Email: hiji3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn